

報道関係者各位

2020年9月10日
慶應義塾図書館
丸善雄松堂株式会社

第32回慶應義塾図書館貴重書展示会

古代 中世 日本人の読書

主催：慶應義塾図書館 協賛：丸善雄松堂株式会社

【会期】2020年10月7日（水）～10月13日（火）9：00～21：00（最終日は16時閉場）

【会場】丸善・丸の内本店4階ギャラリー

〒100-8203 東京都千代田区丸の内1-6-4 丸の内オアゾ内 TEL (03)5288-8881

入場
無料

「慶應義塾図書館貴重書展示会」は、慶應義塾図書館が所蔵する数ある貴重書を各回テーマに沿って展示し、一般の方々に公開しております。毎年多くの来場者にお越しいただき今年で第32回を迎えます。

■ 展示会の見どころ

第32回となる今年は、慶應義塾図書館が所蔵する近代以前の漢籍のコレクション100点を展示します。これらの漢籍は、高尚な学問、すなわち中国の文化全般を学ぶことを目的とする「漢学」を身につけるための教科書であり、当時の「日本人の読書」とは重厚な意味を持っていました。

日本人はこの難解な書物をどのように学習し、またどのように活用したのか。古代から中世にいたる読書の様相を慶應義塾図書館の蔵書でたどります。

■ 展示構成

- I 漢籍の伝来
- II 漢籍の伝授
- III 博士家の証本
- IV 幼学書の学習
- V 成人後の読書
- VI 読書の成果
- VII 抄物一本邦撰述の注釈書
- VIII 古代・中世の読書を追求した先達

【ギャラリートーク開催】

（要予約／先着順・各回20名まで・入場無料）

本展示会監修者、慶應義塾大学 佐藤道生名誉教授が展示物を解説します。

○10月9日（金）18時～ ○11日（日）15時～

◆10月1日午前10時～予約受付開始（下記サイト内）

https://libguides.lib.keio.ac.jp/mit_annual_exhibition

論語疏(ろんごそ)

■主な展示品

【展示書 1】 論語疏（ろんごそ）（〔南北朝末隋〕写） 1軸

重要

『論語疏』は正式には『論語義疏（ろんごぎそ）』と称され、中国六朝時代の学者として知られる梁の皇侃（おうがん）（488～545）の手による『論語』の注釈書です。本書に記された文字の字体字様を詳細に比較検討した結果、本書は遣隋使、遣唐使によってもたらされた、隋以前の中国写本であると推定されます。まとまった紙の写本として仏典以外では現存最古級のもので、詳細は慶應義塾大学発信のプレスリリース「慶應義塾大学三田メディアセンター（慶應義塾図書館）が『論語』の伝世最古の写本を公開（9/10）」をご参照ください。



【展示書 2】 六臣註文選（りくしんちゅうもんぜん）

（南宋（12-13世紀）刊） 5冊

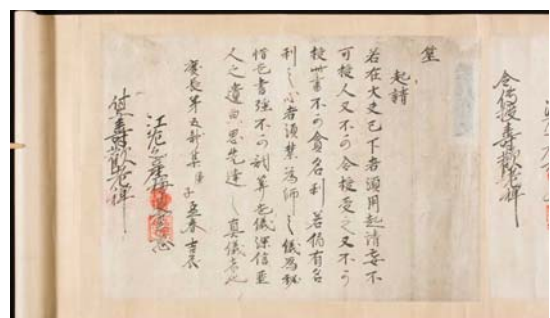
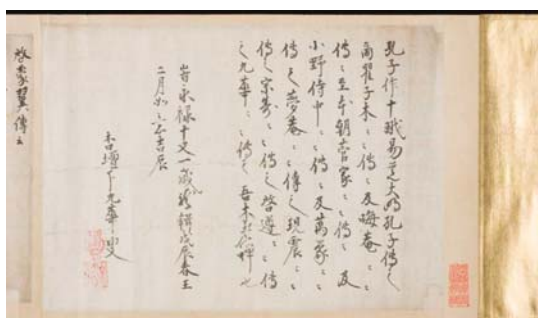
『文選』は梁の昭明太子、蕭統（しょうとう）（501-31）が周代から梁代に至るまでの作者百三十余名の作品約八百篇を選び、それを文体にしたがって分類した一大詞華集です。日本でも『文選』は学問の対象となり、大学寮紀伝道（きでんどう）の重要な教科となりました。中国では宋代に入ると、数多ある文選注の中から李善（りぜん）注と五臣（ごしん）注とが選ばれて刊行され、李善注は字句の典拠・用例を精査した点に特徴があり、五臣注は難解な本文を敷衍し大意を示した点に特徴があります。両者を合わせ見れば（異なる解釈を立てている場合もありますが）、より一層理解を深めることができるため、両者を合刻した六臣注も現れました。展示書はその六臣注の南宋末期、建安刊本であり、四部叢刊の底本となった上海涵芬楼（しゃんはいかんぶんろう）蔵本と同版で、室町時代の仮名点書き入れられています。



【展示書 12】 足利学校易伝授書（あしかががっこうえきでんじゅしょ）

（永禄 11 年（1568）、慶長 5 年（1600）写） 1軸

合戦の日取りなどを決めるのに占（易）が重視された戦国時代において、下野国（現栃木県）にある足利学校は数多くの軍師を輩出する名門の学校として有名でした。本軸には、そこで易の方法が伝授された際に師から弟子たちへと与えられた六通の文書がまとめて収められています。そのうちには、孔子にはじまって当時にいたるまでの伝承を系図にして、この時の伝授の内容がきちんと伝えられたことを保証する文書や、伝授を受ける際の精進潔斎の方法を示した文書、伝授の際に唱えたとされる呪文が記された文書、伝授された内容をみだりに他人に教えてはいけないとする起請文などがあり、興味深い内容となっています。



【展示書 13】 論語（ろんご）（永禄6年（1563）写） 5冊

平安時代中期以降、大学寮で儒教經典を専門としてきた明経道（みょうぎょうどう）の博士家である清原家の証本（家の学問的権威を保証する由緒正しい本）です。室町時代屈指の碩学と評される清原宣賢（きよはらののぶかた）（1475-1550）が加えた訓点を正確に書き移したもので、朱の点によって読み方を表したヲコト点も鮮明に見ることが出来ます。



【展示書 26】 百二十詠詩注（ひやくにじゅうえいしちゅう）（〔室町中期〕写） 2冊

儒教社会の習いとして、貴族の子弟は十歳になると読み書きの学習を始めることになっており、その時に用いる書籍は『礼記』の記述に因んで「幼学書」と呼ばれていました。古代・中世の幼学書としては、『千字文』、『百二十詠』、『蒙求』、『和漢朗詠集』の四種の書が知られ、当時、この四種の幼学書を学習することを「四部の読書」と呼び慣わしていました。展示書は、『百二十詠』の有注本で、現存する伝本が極めて少ないものです。幼学書の場合、師匠だけが有注本を用い、門弟は正文のみの無注本を携えて伝授の場に臨みました。



● 慶應義塾図書館貴重書展示会情報

https://libguides.lib.keio.ac.jp/mit_annual_exhibition

● 丸善・丸の内本店イベント情報

https://honto.jp/store/news/detail_041000046364.html?hsv=ef94dbc3481365ae341243eec3061e65

お問い合わせ

丸善雄松堂株式会社 経営管理部 広報担当 川澄 Tel: 03-6367-6006